

## まえがき

2004年に『好きになる人間生物学』初版を出してから、約10年が経過しました。

自画自賛で恐縮ですが、初版に対しては、多くの好意的なご感想やご意見が読者から寄せられました。「面白かった」「身近な話で、わかりやすかった」「理科嫌いが好きになった」などの感想が寄せられ、大学で教えているのとは違った手ごたえが感じられました。そして、一般の人々の科学に対する興味が決して弱くないこと、人間や生活や環境を科学的に捉えることの重要性がかなり認識されていることを確信しました。

ただ、それぞれの専門分野の方からは、「浅い」「中途半端」という厳しいご意見もいただきましたが、僕自身は、より詳しい知識よりも、「科学的に見る」ことの大切さをわかってもらいたいという気持ちが強かったので、やむを得ないのかもと思います。もちろん、説明のしかたについては反省が必要だと思えますが。

さて、10年の間の生物学の進歩は目覚ましいものがあり、ヒトゲノムが解読され、いろいろな遺伝子がわかってきましたし、さらに、遺伝子だけで決まるのではなく、遺伝子のはたらかせ方の違いというエピジェネティックな領域の重要性もわかってきました。脳のはたらきについても、新しいことがいろいろわかってきました。環境問題についても、中国から飛んでくるPM2.5が深刻になるなど、ますます国際的な取り組みの必要性が高まってきました。そのうえ、2011年に起こった福島第一原発の事故で、多量の放射性物質が放出されました。

そこで、改訂にあたっては、そのあたりを踏まえて、全体を見直し、データなどを更新し、補充することになりました。上に述べたように、内容的には広く浅いものになっていますが、まずは興味を持っていただいて、そこからもっと専門的な他書でより深く理解していただければというのが僕の気持ちです。

もし、何か間違いや疑問点などありましたら、お寄せください。その都度、できるだけ丁寧に、お答えさせていただきたいと思っています。

それでは、「ヒトの生物学」のはじまりです。クマになったつもりで、お楽しみください。

2014年10月

吉田 邦久